

2021年度事業の概要

1 調査と研究

飛鳥・藤原宮跡等の発掘調査	22
平城宮跡等の発掘調査	22
企画調整部の研究活動	23
文化遺産部の研究活動	24
埋蔵文化財センターの研究活動	25
国際学術交流	26
公開講演会	27
研究集会	27
学会・研究会等の活動	27
科学研究費助成事業等	27
国が実施する事業等についての調査・協力	29
●平城宮・京跡の整備と情報発信	29
●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究	29
●キトラ古墳に関する調査研究	29
現地説明会	29

2 展示・公開

飛鳥資料館の展示	30
平城宮跡資料館の展示	30
解説ボランティア事業	31
図書資料・データベースの公開	31

3 その他

刊行物	32
-----------	----

1 調査と研究

飛鳥・藤原宮跡等の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2021年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で1件、藤原京跡で1件(探査)、飛鳥地域で2件である。また、立会調査は6件である。以下、主要な調査成果の概要を示す。

藤原宮大極殿院の調査(第208次)は、大極殿の北方で実施した。周辺では、2019年度の調査(第200次)において東面回廊に取り付く大極殿後方東回廊を発見し、前期難波宮内裏前殿区画との構造上の類似性が改めて注目された。一方、2020年度の調査(第205次)では、大極殿院内庭東北部に、前期難波宮内裏後殿東脇殿に相当する建物の明確な痕跡を確認できなかった。これらの成果を受け、前期難波宮内裏後殿に相当する建物の有無を検討するとともに、同部分の造営から整備に至る過程を解明することを目的とした。調査面積は1,904㎡、調査期間は、4月17日から10月7日までである。

大極殿後方回廊から大極殿北面回廊までの範囲において、礎石据付痕跡や基壇土の検出には至らず、基壇造成にともなう排水溝についても明確な痕跡を確認することはできなかった。この範囲に前期難波宮内裏後殿に相当する建物はなく、建物の造営にも着手しなかった蓋然性が高い。しかし、その一方で、大極殿の北方約26mの位置で新たに基壇の一部を検出し、大極殿後方回廊の中央に回廊より梁行の広い建物が存在した可能性が浮上した。今後の調査では、この基壇の全容解明をめざしたい。

藤原京跡では、日高山瓦窯の調査(第207-3次)をおこなった。調査地は、朱雀門の南方に位置する。今回は、現地形のレーザー測量、地中レーダー探査および磁気探査を実施し、既往調査であきらかになっている瓦窯の位置を再確認するとともに、新たに瓦窯が存在する可能性をあきらかにすることができた。

飛鳥地域では、甘檜丘(第207-4次)、石神遺跡東方(第209次)の調査をおこなった。

甘檜丘(第207-4次)の調査は、国営飛鳥歴史公園(甘檜丘地区)内のトイレ改築にともなうものであったが、既設浄化槽により遺構面が失われており、顕著な遺構は確認できなかった。

石神遺跡東方(第209次)の調査は、石神遺跡および小墾田宮に関連した遺構の検出を目的に実施した。調査面積は301㎡、調査期間は2022年1月6日から3月17日までである。本調査では、東西堀1条、東西溝1条、掘立柱建物1棟、竪穴建物4棟、斜行溝1条、土坑2基等を検出した。このうち東西堀および東西溝は、石神遺跡の南限施設の延長部にあたる。

平城宮跡等の発掘調査

都城発掘調査部が平城地区において2021年度に実施した発掘調査は、平城宮跡3件(第633・642・646次)、平城京跡7件(第638～641・643～645次)である。以下、調査成果の概要を紹介する。

平城宮東院地区の調査(第633次)では、大型の東西棟掘立柱建物のほか、複数の掘立柱建物・掘立柱塀や素掘溝等、多くの遺構を検出した。特に大型東西棟掘立柱建物については桁行9間、梁行4間の総柱建物という全容を把握し、建物の上部構造を推定するためのデータを取得した。さらに、周辺の遺構配置等の検討により、この建物が天皇や皇太子等が住まう宮殿の正殿に相当する可能性が高いとの見通しを得た。また、大別5時期分の遺構変遷を確認し、当該地における土地利用の変遷を描写するための知見を得た。

平城宮西北部の調査(第642・646次)の調査地はいずれも宮内の特別史跡指定地外で、東西に隣接する。両調査区において、東西方向の一連の素掘溝を検出した。8世紀前半～12世紀初頭に機能していたとみられ、平城遷都当初より東方の佐紀池から西方の秋篠川へと排水する水路として機能していたと考えられる。

平城京左京一条二坊十五坪の調査(第638・639次)は、隣接する2件の個人住宅建設にともなうものである。両調査区にまたがる掘立柱建物と礎石建物等を検出し、また掘立柱建物から礎石建物への建て替えが判明する等、土地利用の様相とその変遷の解明に資するデータを取得した。さらに、礎石建物の基壇に木製の外装が施されていたことも判明した。木製基壇外装は平城宮・京跡では初めての発見であり、全国的にも検出例が限られる貴重な遺構である。なお、両調査は施工業者が異なる等制約も大きかったが、施主をはじめとする多くの方々の多大なご協力を得て、迅速かつ的確な対応により2つの区画を連続して調査しえた結果、上記の成果を挙げるすることができた。

興福寺境内の調査(第640次)は、境内整備事業にともなうものである。東金堂院西面回廊のうち東金堂正面に開く門の想定位置付近、および東金堂院と伽藍全体の南限を兼ねる南面築地塀想定位置の2ヵ所に調査区を設けた。東金堂正面の門とそれに取り付く回廊については、規模や構造とともに、奈良時代創建当初の位置や規模を踏襲するかたちで中世に建て替えがおこなわれていたことが判明した。とりわけ、土器の年代観から治承4年(1180)の南都焼討によるものと特定できる焼土面を確認できた意義は大きい。南面築地塀については、改修にともなう柱穴や溝等を検出し、その歴史的変遷の一端があきらかになった。

平城京左京三条四坊十坪の調査(第641次)では、間仕切り柱をもつ掘立柱建物や複数の掘立柱塀等を検出した。このうち掘立柱建物、およびそれと柱筋を揃える東西塀は、周辺の調査で検出した掘立柱建物と一連の遺構群を形成するとみられる。また、それらが坪の1/8の範囲に収まるように配置されていることが判明し、当該坪では1/8町単位での宅地利用がなされていた可能性があるとの見通しを得た。

平城京右京三条一坊十坪の調査(第643次)では、湿地状の堆積土や水の流れにともなう堆積を確認する等、当該地の原地形の復元に資するデータを得た。

法華寺庭園の調査(第644次)は、名勝法華寺庭園の石組護岸修理にともない実施した。中島西北角で検出した凝灰岩製の切石は、古代の礎石の可能性があるものとして注目される。法華寺境内の調査(第645次)では、古代のものを含む土坑数基等を検出した。

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の文化財担当者に対する専門的な研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報内容の充実、国際的な文化財の調査や保護に関する協力・支援と学術交流・研修、平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動といった事業を実施している。また、奈良文化財研究所がおこなう様々な事業について、全体的・総合的な企画としての調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。こうした当部の活動は、2021年度も2020年度に引き続いて、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を大きく受けた。しかし、その一方、それを克服する取り組みも出てきている。

企画調整室が管轄する文化財担当者専門研修は、3密を避けるために1課程の定員を10名に限定し、感染予防策を徹底するとともに、一部研修においては、オンラインによるリモート研修をおこなうことで予定していた13課程すべてを実施することができた。研修総日数67日、研修生総数139名であった。

文化財情報研究室では、文化財情報電子化の研究と研究所事業の多言語化を進めている。文化財情報電子化の研究では、発掘調査報告書に関するデータベースである全国遺跡報告総覧を研究所ホームページにて公開しており、国の内外より極めて多くのアクセスを得ている。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。2021年度には、全国の博物館等の文化財

関係機関が作成している紀要論文等の情報を集約した「文化財論文ナビ」、全国61万件の文化財データを検索できる「文化財総覧WebGIS」を公開した。また、奈文研がもつ全国遺跡情報13万件を欧州連合(EU)による多国間での考古学情報の統合・相互連携により考古学情報へのアクセスを容易にするシステム構築、コミュニティ形成をめざしたARIADNE plus(欧州考古学情報基盤)事業にデータ連携させた。

国際遺跡研究室が主管する文化財保護に資する国際協力には、①1993年から継続しておこなっているカンボジアとの共同研究事業、②文化庁受託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業(相手国拠点:カザフスタン共和国国立博物館)、③セインズベリー日本藝術研究所(英国)との研究交流、④ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)が実施する研修への協力事業がある。いずれの事業もコロナ禍のもと、現地に渡航しておこなう海外事業や海外からの招聘者を対象とした国内事業の実施はかなわなかったが、オンラインでの調整協議や研修を進めることで、所定の成果を得ることができた。この際作成した海外向けの研修用動画等は奈文研にとって貴重な財産となった。

展示企画室では、従来連携してきた都城発掘調査部(平城地区)に加え、文化遺産部、埋蔵文化財センターの研究成果の展示に積極的に取り組んでいる。2021年度は、各部・センターの協力のもと、春期特別企画展第一部「平城宮跡保存運動のさががけ—大極殿標本建設式120周年—」、同展第二部「大地鳴動—大地の知らせる危機と私たちの生活—」(ともに4月29日~6月27日)、夏期企画展「奈良を測る—森蘊の庭園研究と作庭—」(8月7日~9月12日)、秋期特別展「地下の正倉院展—木簡を科学するⅡ—」(10月9日~11月7日)、冬期企画展「発掘された平城2020・2021」(2月11日~3月27日)を開催した。残念ながら春期の2展示は、新型コロナウイルス対策のための資料館の臨時休館(5月2日~6月20日)により9日間のみ公開となったことから、その内容を2022年度の展示に活かすこととした。2020年度から開始したYouTube「なぶんけんチャンネル」で5本の展示関連動画を配信した。

写真室では、研究所内の各文化財記録写真の撮影、写真データの保存管理をおこなっているほか、写真記録の高精度・効率化を目的に様々な撮影手法を開発している。また、近年では、キトラ、高松塚両古墳の壁画の経年記録の撮影、法隆寺金堂壁画の撮影、第一次大極殿院南門の復原工事の記録写真の撮影等を定期的に実施している。このほか、研修動画を作成し、ACCU主催の海外の文化財担当者を対象とした研修事業の講師をリモートで務めた。これらに加え、オンラインによる各種の集会・研修や動画撮影についての協力も増えている。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室をおき、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡整備・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等の国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2021年度は、仁和寺・唐招提寺・興福寺・薬師寺・当麻寺・法華寺や、奈良関係の旧家等が所蔵する歴史資料・書跡資料調査をおこなった。

仁和寺の調査では、御経蔵聖教第98函～第109函の調書原本校正・写真撮影を実施した。また、御経蔵第90函～第105函の聖教について、書誌事項を検討し、『仁和寺史料 目録編〔稿〕5』として刊行した。唐招提寺の調査においては、聖教第1函の調書原本校正や、聖教第9函～第10函の写真撮影をおこなった。興福寺の調査では、井坊家記録第4函の調書作成・二条家記録第10函～第11函の写真撮影を実施した。薬師寺においては、第60函・第63函の調書作成と、第26函～第27函の写真撮影をおこなった。当麻寺では所蔵する未整理の經典を調査し、東29函～西16函の調書を作成した。また、当麻寺の堂舎に記された中世～近世の銘文について、赤外線撮影・ひかり拓本測量等の技術を用いて釈読作業をおこない、その成果の一部を『奈文研論叢3』に公表した。法華寺所蔵の未整理の歴史資料を調査し、掛軸・第7函の調書作成・写真撮影をおこなった。

個人蔵の歴史資料については、氷室神社宮司の大宮家所蔵文書で奈良市教育委員会と連携研究「大宮家文書の共同研究」の協定を結び、函文書の調書作成を進めた。また、金峯山寺関係の個人蔵の資料では第5函～第7函の調書作成・写真撮影をおこなった。

当研究所に寄贈された歴史資料関係については、興福寺関係資料で科学研究費補助金も充当して、悉皆的な調査をおこなった。また、明治時代の平城宮跡保存運動関係資料を調査し、成果の一部を平城宮跡資料館の春期特別企画展「平城宮跡保存運動のさきがけ—大極殿標本建設式120周年—」に反映させた。

その他、調査協力の依頼を受けて、文化庁による仁和寺聖教調査等に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復、活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法の調査研究を、現存建物のほか、修理等の際に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。2021年度におこなった調査研究の概要を紹介する。

基礎的な調査研究として、2020年度に引き続き奈良県内の社寺建築の悉皆調査をおこなった。また、法隆寺金堂の古材については、新たに発見された古材について追加調査をおこなった。さらに、重要文化財綿業会館の家具調査をおこない、現在も使用されている家具の設計資料や製作年代等をあきらかにし、その成果は2022年3月に報告書として刊行した。

受託研究業務としては、鳥根県松江市から松江市文化財保存活用地域計画の策定にむけて社寺建築悉皆調査をおこなった。調査では、約2,500棟の社寺建築を確認し、松江市内の社寺建築の一覧とその分布をあきらかにし、その成果については2022年3月に松江市より報告書が刊行された。さらにそのうち建築年代の古いものや技術的に優れたもの、地域的特色を示すものを選び、合計40棟について詳細調査をおこなった。和歌山県高野町からは、昨年度に引き続き、町内歴史的建造物の調査業務を受託した。本年度は高野山内の塔頭の建築を中心に、合計36棟について詳細調査をおこなった。新潟県佐渡市からは、小木町の伝統的建造物群保存対策調査を受託した。本年度は二か年計画の初年度にあたり、地区全体の悉皆調査をおこない、地区の特色を示す建築については詳細調査をおこなった。奈良県生駒市からは、生駒市史編さんにともない、市内の歴史的建造物の悉皆調査をおこなった。調査では社寺を除き、昭和30年代までに建てられた建築について調査をおこない、合計1,419棟の建築を確認した。今後は、悉皆調査の成果をもとに地域を代表する建築について詳細調査をおこなう予定である。

このほか、各地で実施されている文化財建造物の保存、史跡整備事業等について指導・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観を主な対象として、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。また、文化的景観保護に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めつつ、文化的景観の具体的事例に関する取組として、地方公

共団体からの受託研究等を通じて、保護措置の諸問題について検討を重ねている。

今年度は、日本のスギ林業地域の文化的景観に関する比較研究のため、情報収集、資料整理をおこなった。その他、以前から当研究所ウェブサイトにおいて公開している日本全国の重要文化的景観選定地区の概要について、最新情報を追加した。

地方公共団体からの受託研究については、新たに京都府相楽郡和束町から和束の茶業景観の全覧図作成業務を受託し、原山地区の茶業景観に関する土地の地籍図・土地台帳のデータ化を進め、和束町のほぼ全域に広がる茶業景観を説明するための全覧図の下図を作成した。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、遺跡等の整備・活用と庭園について調査研究をおこなっている。

遺跡等の整備・活用については国際的な動向も視野に入れながら、主として国内に所在する遺跡等の保存・活用およびそのための整備事業について、理念や計画、設計、技術に関する調査研究をおこなっている。

2021年度は、令和4年3月15日に「移築された遺跡由来の遺構および石造物の現状と課題」をテーマとして遺跡整備・活用研究集会をおこなったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の措置として関係者8名による小規模開催とした。

平城宮跡の活用に関する実践的研究として、2020年度から6カ年にわたり、Ⅰ. 復元建物のある空間における歴史的な文脈にもとづく体験の提供、Ⅱ. 遺跡現地と遺物・情報の関係性の再構築、Ⅲ. 遺跡のある地域との関係性の再構築の3つのテーマにもとづき、遺跡現地の活用を促進する取り組みをおこなっている。2021年度は、兵庫県養父市立八鹿小学校の赤米献上隊の受け入れで推定宮内省地区にて贈呈式をおこなったほか、平城宮跡管理センターとの共催による木簡体験プログラムの試行実施、古代の盤上遊戯「かりうち」キッドの試作と朱雀門前でのテストプレイをおこなった。

古墳壁画の保存活用については、特別史跡キトラ古墳の墳丘近くに壁画の残存状況を示す乾拓板が設置されており、その活用と遺跡見学の試みを毎年国営飛鳥歴史公園と共催でおこなった。また、高松塚古墳の壁画についても乾拓板を利用した活用をおこなった。

庭園の調査研究については、奈良市における庭園の悉皆的調査成果をとりまとめた『奈良市の庭園総合調査報告書』、学報『近世庭園の研究』を刊行した。また、奈文研創設時の建造物研究室長であった森蘊の作庭および歴史的庭園の修復に関する業績に関わる展示を平城宮跡資料館等でおこない、図録『森蘊の世界—奈良・平安の庭を求めて—』を刊行した。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターは、遺跡・調査技術研究室、環境考古学研究室、年代学研究室および保存修復科学研究所の4室から組織されている。当センターは、文化財の調査、研究および保存に関する先進的な研究に取り組むとともに、これらの研究成果を、文化財担当者研修やワークショップにより広く普及を図っている。また、国や地方公共団体の要請にもとづき文化財保護に関する専門的な助言や協力をおこなっている。2021年度の各研究室の活動内容は以下のとおりである。

保存修復科学研究所では、主に考古遺物を対象とした材質分析に関する研究、それらの保存方法に関する研究を進めるとともに、装飾古墳等の遺跡に対しては環境制御にもとづく現地保存法について研究を進めた。材質分析に関する研究ではLA-ICP-MS等の先駆的分析手法を導入することで分析から得られる情報の深化を図るとともに、既に汎用化された分析手法の妥当性、問題点について再検討を進めた。また、これまで化合物として明確な同定には至っていなかった“Black spots”と呼ばれる銅合金製品の腐食生成物について、電子線回折を用いることで化合物種をあきらかにした。これらの発生に対して展示・収蔵環境が及ぼす影響や、Black spotsが発生した遺物に対する再処理方法について検討を加えるとともに、この成果の一部を昨年度文化庁が刊行した『水中遺跡ハンドブック』に掲載した。考古遺物の保存処理法に関する研究では、新たに漆塗膜の変形メカニズムの解明に着手するとともに、引き続き大型木製品の薬剤含浸法について検討をおこなった。遺跡の保存では高松塚古墳やキトラ古墳の古墳壁画をはじめ、多くの装飾古墳や石造文化財にも共通して生じ得る乾湿繰り返し劣化に着目し、その劣化メカニズムをあきらかにするために、現在劣化が認められる遺跡において環境条件の取得をおこなった。また、砂岩や凝灰岩といった軟岩に水分が浸透する際に、破壊に影響する応力がどこで、どれほど発生するのか評価するため、画像解析による検討に着手した。

環境考古学研究室では、波怒棄館遺跡（宮城県）、金井下新田遺跡（群馬県）、保美貝塚（愛知県）、公家町遺跡・相国寺旧境内（京都府）、西大寺食堂院（奈良県）等の遺跡から出土した動物遺存体を分析した。群馬県金井下新田遺跡では、6世紀初頭の榛名山噴火による火砕流堆積物に覆われた馬や集積した鹿角等の分析を実施した。その結果、馬は子馬や雌馬で、噴火時期や馬の蹄跡もあわせて検討すると、遺跡西側に限定放牧のような施設や場所が存在した可能性があることを指摘した。また、特別な区画と推定される囲い状

遺構の内部から、集積した鹿角とともに生産残滓と考えられる鹿角片が出土しており、単なる鹿角製品の生産工房というよりも、祭祀等特殊な製作行為が想定された。

研究成果の発信として、日本第四紀学会や日本動物考古学会等で研究発表をおこなった。また、人材育成として、文化財担当者研修やACCU集団研修で国内外の文化財担当職員や研究者に対して環境考古学の研修をおこなった。

年代学研究室では、出土遺物、建造物、美術工芸品等の多岐にわたる木造文化財を対象とした年輪年代学に関する研究を実施するとともに、現生木の年輪年代調査による年輪データの蓄積をおこなった。平城宮・京出土の曲物に対象を絞った研究では、曲物の年輪年代と同遺構出土の木簡年紀との対応関係を明らかにし、また、甲斐善光寺に伝わる木造源頼朝・実朝坐像の解体修理にともなう研究では、樹皮が残存する頼朝像の体幹部材について、文保三年（1319）の像内年紀と非常に良く整合する1318年秋頃～1319年春頃という伐採年を明らかにする等、各種木造文化財の年輪年代学に関する研究を実施した。現生木調査では、東北地方における地域標準年輪曲線構築の成果を公表するとともに、兵庫県妙見スギについて試料収集を実施し、年輪変動の地域性を検討するデータの蓄積をおこなった。また、竹中大工道具館特別展や平城宮跡資料館特別展等について、所蔵する木材標本の貸し出しや、解説書刊行の協力をおこない、年輪年代学研究的普及をおこなった。

遺跡・調査技術研究室では、継続している古代の官衙・寺院関連資料の情報収集および整備をおこなっている。また、古代官衙・集落研究集会を開催し、研究報告資料および資料集を刊行した。考古資料および文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築も公開を目標に整備が進んでいる。

調査現場における災害痕跡の調査・資料採取・分析・報告も進んでいる。調査手法開発としては、三次元計測手法の検討、多チャンネル地中レーダー等探査技術の改良、ひかり拓本の開発等、自治体等で広汎に活用可能な技術を中心に研究をおこない、加えて大型文化財用X線CT等の利用等も進めている。これらの情報提供・技術の普及を通じ、文化財保護行政に寄与する研究を推進したい。

国際学術交流

奈文研では、各国に所在する諸機関と協約・協定等を締結し、学術共同研究や交流・協力事業を展開している。2021年度は、前年度に引き続き新型コロナウイルスの感染拡大を受けて海外渡航が困難であったが、オンラインツールの積極的な活用によって対応した。

中国に関しては、中国社会科学院考古研究所との北魏洛陽城出土遺物の整理研究および学術交流、河南省文物考古研究院との窯跡出土遺物等の共同研究、遼寧省文物考古研究院との三燕文化遺物の共同研究に加え、2022年3月には復旦大学および大足石刻研究院との三者による大足石刻保護に関する協定書を締結した。中国社会科学院古代史研究所および河北師範大学とは、木簡・簡牘の共同研究を進めた。韓国に関しては、国立文化財研究院（2022年2月22日に改称）と「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」および発掘調査交流を継続しているが、2021年度は渡航をともなう事業を見合わせざるをえなかった。また、慶北大学校と木簡に関する共同研究をおこなっている。

カンボジアのアンコール・シェムリアップ地域遺跡保護整備機構（APSARA）とは、2002年よりアンコール・トム内の西トップ遺跡における調査研究を進めているが、現在は中央祠堂の調査修復作業が最終局面を迎えている。カザフスタン共和国国立博物館とは、今年度をもって、文化庁の委託業務「カザフスタンにおける考古遺物の調査・記録・保存に関する技術移転を目的とした拠点交流事業」を完了した。2021年12月にはウズベキスタン・サマルカンド所在の国際中央アジア研究所と文化財分野での協力に関する覚書を締結し、専門家交流や文化遺産に関する共同研究等を推進する。モンゴル国立文化遺産センターとは、2018年9月に締結された、東文研を加えた三者による文化遺産の研究交流の合意による交流を継続している。台湾の中央研究院歴史語言研究所とは、木簡・簡牘の研究資源化についての交流を進めている。

アジア諸国に加え、英国に所在する三機関との学術交流を、近年活発におこなっている。セインズベリー日本藝術研究所とは日本考古学の国際的発信を進めており、ケンブリッジ大学およびヨーク大学とは、欧州研究会議や日本学術振興会の助成を受けた共同研究を推進している。以上に加え、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）がおこなう研修への協力を継続している。

公開講演会

◆第126回公開講演会（オンラインのみ）
2021年6月25日（金）～6月28日（月）

視聴延べ回数 976回

■講演 「古代の人形（ひとがた）を読み解く」
都城発掘調査部 平城地区考古第一研究室
研究員 浦 蓉子

■講演 「都市ヨークにおける初期中世装飾石彫の製作」
都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区考古第三
研究室 研究員 岩永 玲

◆第13回東京講演会「特別史跡山田寺跡
史跡指定100年」

2021年10月23日（土）

会場参加 135名、ライブ配信参加 358名

■講演 「史蹟名勝天然記念物保存法と山
田寺跡の史蹟指定」
文化遺産部長 内田 和伸

■講演 「山田寺の歴史と発掘調査」
都城発掘調査部 副部長 清野 孝之

■講演 「建築史からみた山田寺
—東アジアとの関連を中心として—」
都城発掘調査部長 箱崎 和久

■講演 「出土遺物からみた山田寺
—瓦埴類を中心に—」
都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区考古第三
研究室長 林 正憲

■講演 「山田寺の調査研究成果の活用」
都城発掘調査部 平城地区 主任研究員
西田 紀子

■講演 「「飛鳥・藤原の宮都とその関連資
産群」の世界遺産登録に向けて」
所長 本中 眞

◆第127回公開講演会

2021年11月13日（土）

会場参加 84名

■講演 「神々の住まいの内装—石清水八
幡宮本殿の室礼（しつらい）について」
都城発掘調査部 平城地区遺構研究室
研究員 山崎 有生

■講演 「どうして古墳の副葬品は現代ま
で残るのか？ —模擬古墳による金属製品
の腐食メカニズムの検討」
埋蔵文化財センター 保存修復科学研究室
研究員 柳田 明進

研究集会

◆オンラインリレートーク「海外から見た
日本考古学の魅力」

2021年5月17日、7月30日、
9月17日、11月1日、
2022年1月14日、3月9日

◆古代瓦研究会（第21回）
第21回シンポジウム「鵜尾・鬼瓦の展開
2 鬼瓦」

2022年2月5日、6日

◆古代宮衙・集落研究会（第25回）
「古代集落の構造と変遷2（古代集落を考
える2）」

2021年12月17日、18日

学会・研究会等の活動

◆第5回東アジア木造建築史研究会
2022年3月30日◆文化財写真技術研究会「(特集)文化財の
活用と発信・保存と記録」
2021年12月12日◆関西縄文文化研究会11月例会「山内考
古資料 岡山県福田貝塚資料見学会」
2021年11月20日◆関西縄文文化研究会2月例会「山内考古
資料 神奈川県田戸遺跡・子母口貝塚・大口
坂貝塚資料見学会」
2022年2月19日

科学研究費助成事業等

◆木簡等の研究資源オープンデータ化を通
じた参加誘発型研究スキーム確立による知
の展開 馬場 基 基盤研究（S）◆平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境の
グローバル資源化 渡辺 晃宏 基盤研究（A）◆災害で埋没した建物による民家建築史の
研究 箱崎 和久 基盤研究（A）◆東北アジアの農耕化過程における食と調
理の変化への考古生化学的アプローチ
庄田 慎矢 基盤研究（A）◆南都の未整理文書聖教にもとづく寺社と
その周辺社会の調査研究

吉川 聡 基盤研究（B）

◆松帆銅鐸発見を契機とする銅鐸論の再構築
難波 洋三 基盤研究（B）◆和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究
松村 恵司 基盤研究（B）◆国家形成前段階における親族構造の地域
的変異に関する研究—九州南部を中心に—
岩永 省三 基盤研究（B）◆中央アジア 天山—パミール地域におけ
る後期旧石器文化成立過程の研究
国武 貞克 基盤研究（B）◆3次元データによる瓦の同范認識技術の
基礎的研究 林 正憲 基盤研究（B）◆災害碑アーカイブ構築を目的とした市民
参加型調査の実践
上根 英之 基盤研究（B）◆ユーラシア東部における細石刃石器群の
出現と拡散：中国北部クロスロード仮説の
検証 加藤 真二 基盤研究（B）◆蛍光X線分析と鉱物組成分析による大
和の古代寺院・宮都出土瓦の生産・供給体
制の研究 清野 孝之 基盤研究（B）◆埴輪の生産・流通体制の総合的検証にとも
づく王権中枢部巨大古墳群造営過程の解明
廣瀬 覚 基盤研究（B）◆古代都城から出土する製塩土器の生産地
推定 神野 恵 基盤研究（B）◆土製鋳型を中心とした冶金関連資料によ
る東アジア冶金史学の構築
丹羽 崇史 基盤研究（B）◆古建築用語の相互訳及び英訳を通した系
統的把握による東アジア木造建築史の基盤
構築 鈴木 智大 基盤研究（B）◆日本列島における現生人類移住初期の環
境適応史研究 森先 一貴 基盤研究（B）◆古代官衙における空間構造の変遷と展開
に関する実証的研究
小田 裕樹 基盤研究（B）◆古代における年輪年代学的木材産地推定
を可能にする標準年輪曲線ネットワークの
整備 星野 安治 基盤研究（B）◆カザフスタンにおける現生人類北回り拡
散ルートの解明に関する国際共同研究の基
盤強化
国武 貞克 国際共同研究強化（B）

◆展示施設を拠点とする地域住民参加型の歴史的建造物の調査

西田 紀子 基盤研究 (C)

◆呪符木簡の時代的地域的特質からみた「木に文字を記す文化」の史的考究

山本 崇 基盤研究 (C)

◆藤原宮造営に伴う造瓦の新技術とその導入経路に関する総合的研究

石田 由紀子 基盤研究 (C)

◆近世における北前船と東北産木材の流通に関する年輪年代学的研究

光谷 拓実 基盤研究 (C)

◆近世末期から近代に生じた日本庭園の意匠の地域性と現代への継承—出雲地方を中心に

中島 義晴 基盤研究 (C)

◆鎖国期日本のマジョリカ陶器色絵フクリー文アルパレロとカトリック修道院

松本 啓子 基盤研究 (C)

◆塩類風化が進行する遺跡構成材料からの効果的な脱塩方法の開発

脇谷 草一郎 基盤研究 (C)

◆ポスト・バイオン期のクメール建築の建築的特徴に関する研究

大林 潤 基盤研究 (C)

◆日本と中国における大工道具の比較による東アジア木造建築技術史の基盤構築

李 暉 基盤研究 (C)

◆絵画表現の多様性を生みだす彩色材料のナノ構造

杉岡 奈穂子 基盤研究 (C)

◆東アジア出土の植物灰ガラスは西アジア産か？—ガラス交易路解明に向けての基礎研究—

田村 朋美 基盤研究 (C)

◆古墳に埋葬された鉄製文化財の腐食は予測可能か？—数値解析による現地保存評価の確立

柳田 明進 基盤研究 (C)

◆古代における食文化の実態解明に関する環境考古学的研究

山崎 健 基盤研究 (C)

◆先端技術による未発見遺跡の探査・研究および保護手法の開発

金田 明大 挑戦的研究 (開拓)

◆歴史災害の実像解明への考古・歴史・地質学的複合解析による災害履歴検索地図の開発

村田 泰輔 挑戦的研究 (開拓)

◆埴輪ハケメの年輪年代学：年輪年代学の同一材推定を応用した埴輪同工品の認定

星野 安治 挑戦的研究 (萌芽)

◆後期旧石器時代開始期の日本列島における新人到来研究の革新

国武 貞克 挑戦的研究 (萌芽)

◆新しい遺跡を発見する：機械学習による自動地形判読手法の開発

高田 祐一 挑戦的研究 (萌芽)

◆古墳時代中期王権中枢部における埴輪生産体制の実証的研究—奈良市佐紀古墳群を中心に

大澤 正吾 若手研究 (B)

◆渤海遺跡出土建築部材の基礎的研究—三次元計測データの活用—

中村 亜希子 若手研究 (B)

◆シルクロード天山北路の形成過程に関する考古学的研究

山藤 正敏 若手研究

◆アンコール王朝の終焉と陶磁器需要の変容に関する考古学的研究

佐藤 由似 若手研究

◆昭和初期における歴史的建造物保存修理の構造補強体系の構築

前川 歩 若手研究

◆墨書木製品の分類を手がかりとした日本における木簡利用全史の解明

藤間 温子 若手研究

◆古代壁画の制作技法の伝習に関する研究—シルクロード近隣地域と日本の壁画を中心に

中田 愛乃 若手研究

◆文化的景観における棚田集落の相対的価値の解明にむけた比較研究

恵谷 浩子 若手研究

◆石造物からみるブリテン島における古代と初期中世の境界

岩永 玲 若手研究

◆玉類の流通からみた弥生・古墳時代併行期の日韓交渉

谷澤 亜里 若手研究

◆西日本集落遺跡の分析に基づく古代地域社会の実証的研究

道上 祥武 若手研究

◆飲食物表現からみた古代東アジアにおける古墳葬送儀礼の考古学的研究

松永 悦枝 若手研究

◆文化財修理に用いられる和紙の膨潤収縮挙動

金 旻貞 若手研究

◆出土木製遺物の保存処理の飛躍的効率化を実現する溶媒蒸発を用いた薬剤含浸技術の確立

松田 和貴 若手研究

◆考古系展示施設における観覧行動分析とそれに基づく多様な「学び」の構築と実践

廣瀬 智子 若手研究

◆越後大工・小黒空右衛門一族の作風—近世在方大工の作家論的研究

目黒 新悟 若手研究

◆『築山庭造伝』前編・後編にみる作庭技術とその流布に関する基礎的研究

高橋 知奈津 若手研究

◆日本に伝存する漢字文義謎資料のデータベース化による文化史的研究

呉 修喆 若手研究

◆大破した寺院聖教の保存・活用に向けた調査方法に関する研究

橘 悠太 若手研究

◆中国古代簡牘における規範字体算定の基礎的研究

畑野 吉則 若手研究

◆3D デジタル技術等の多角的応用による土器製作者の動的身体技法復元のための基礎研究

平川 ひろみ 若手研究

◆残材と周辺植生に基づく古墳時代集落における木材調達とその利用に関する研究

浦 蓉子 若手研究

◆埴輪生産からみた古墳時代労働力編成システムに関する考古学的研究

木村 理 研究活動スタート支援

◆人工知能 (AI) による深層学習を活用した縄文原体の素材同定

高野 紗奈江 研究活動スタート支援

◆近代における日本人産婆の越境実態の検証—渡韓産婆の事例を通じて—

鷹 素妍 研究活動スタート支援

◆平安京・大和国における瓦生産・流通構造—9～12世紀を中心に—

田中 龍一 研究活動スタート支援

◆植物考古学から探るイネ、雑穀、ムギ食文化の交流と変容

庄田 慎矢 学術変革領域研究 (A) 計画研究

◆3D 石器形態系統分類学による日本列島およびサフル大陸における人類進出の解明

野口 淳 新学術領域研究 (研究領域提案型) 公募研究

◆植物遺体群調査解析システムの新構築による古代都城の植物資源利用と集落生態系の解明

上中 央子 特別研究員奨励費

◆全国遺跡報告総覧

高田 祐一 研究成果公開促進費 (データベース)

◆奈良の都の木簡に会いに行こう！2021 馬場 基 ひらめき☆ときめきサイエンス ～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮・京跡の整備と情報発信

例年同様、国土交通省や文化庁による各種事業に対して、調査研究・協力・専門的見地からの助言等をおこなった。

国土交通省による大極殿院南門の復原工事は、最終年度となり、飾金具等の取り付け、素屋根の移動、竣工等の工程となり、工事の節目ごとに写真室職員による写真撮影をおこない、事業者間での写真の共有化を図った。前年度来のコロナ禍のため公開事業は中止となり、毎月2回の工事関係者による定例会議に出席し、情報の共有と各種課題に対応した。そのなかで、扁額の文字の彫りかたについて、現存する古代の扁額を調査し、制作に反映させた。

2010年から進めている第一次大極殿院の復原研究は、都城発掘調査部遺構研究室を中心におこない、東楼に取り付ける屋根まわりの飾金具について、古代の技法による製作実験をおこなうとともに、東楼の寄棟造の屋根に設置する鴟尾の棟積みとの納まりについて検討し、方向性を示した。2021年度に出版予定だった復原研究の報告書は、諸事情で出版を延期し作成を継続した。

企画調整部では、南門の復原工事にともなう、各事業者が撮影した写真の整理・分類をおこなうとともに、南門の復原工事業のまとめとして、奈良時代における南門の性格から復原研究、復原工事に用いた材料や技法等についての解説資料の作成をおこなった。

以上の、第一次大極殿院および南門の復原にかかる各種事業は、国土交通省飛鳥歴史公園事務所からの委託研究としておこなった。

平城宮いざない館の活動については、2018年の開館以来、第4展示室の展示の学芸業務を中心に、国土交通省国営飛鳥歴史公園ならびに平城宮跡管理センターに協力をおこなっており、これを2021年度も継続した。

このほか、文化庁がおこなう平城宮跡の整備管理業務、歴史的環境維持業務等について、助言をおこなうとともに、現地において調整・対応した。(箱崎和久)

●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究

国営飛鳥歴史公園内に設置の仮設修理施設において、高松塚古墳壁画の現状の把握と材料等に関する知見を得るための調査研究を進めている。

本年度は石室解体報告書作成のためのデータ整理、石室解体に関する映像記録のデジタルアーカイブと映像コンテンツの作成、調査および整備過程を統合した三次元モデルの作成、築造時に用いられ、発掘調査で

出土した水準杭の切り取り資料の展示台座の作成等を実施した。

また、装飾古墳における保存管理や活用の状況、環境モニタリング等の研究をすすめ、石室石材の安定化のための輸送を想定した石材固定フレームの要件の検討、漆喰および凝灰岩を安定して保管するための物理的性質に関する調査を進めた。

また、1972年(昭和47年)発掘調査出土品のうち、飛鳥資料館で保管されている資料の再整理をおこない、計測および図化を実施し、公開普及事業として文化庁の一般公開に協力し、作成した乾拓板による体験会を実施した。(金田明大)

●キトラ古墳に関する調査研究

保存・活用に関する事業では、石室内より出土した棺材漆片等の遺物の適切な保存をおこなうための研究と保存・活用のための必要な措置、発掘調査により得られた資料およびデータの公開に向けた整理とアーカイブ化、整備したキトラ古墳の活用に関する取組、キトラ古墳以外の壁画古墳等の保存環境調査、古墳石室内における鉄製遺物の腐食に関する研究等を実施した。

壁画の安定化に関する事業では、壁画を安全に測定できる可搬式のX線回折装置および分光分析装置を用いた壁画の保存・活用に資する研究、中長期の期間にわたる壁画の状態変化の有無を評価するための現状記録法の検討および高精細カメラによる記録、壁画の記録方法の検討等を実施した。

文化庁壁画保存管理施設では、研究員が常駐して展示室等における温度や湿度等の日常管理および運営をおこなうとともに、施設内の環境調査、壁画および出土遺物等の公開等を実施した。(清野孝之)

現地説明会

◆2021年10月2日(土)

飛鳥藤原第208次調査(藤原宮大極殿院)

発掘調査現地見学会

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)

研究員 岩永 玲

参加者619人 調査面積1,904㎡

◆2021年10月9日(土)

平城第640次調査(興福寺東金堂院の門と回廊)

発掘調査現地見学会

都城発掘調査部(平城地区)

研究員 目黒 新悟

参加者949人 調査面積260㎡

2 展示・公開

※新型コロナウイルス感染症対策のため、5月2日から6月20日を臨時閉館とした。

飛鳥資料館の展示

◆ミニ展示「新収蔵品紹介―「呉」と書かれた瓦」

2021年4月23日～5月1日

檜隈寺跡付近出土の「呉」と刻書された丸瓦が、2021年2月に所蔵者から寄贈されたことを記念して、当該資料を展示した。会期中の入館者数535人。

◆夏期企画展

「第12回写真コンテスト作品展「飛鳥の木」」

2021年7月16日～9月12日

飛鳥の歴史と人々の営みを感じさせる飛鳥の木の写真を募集し、応募160点の作品を会場に展示した。審査と来館者投票による上位者を表彰した。会期中の入館者数2,112人。応募160点。

◆秋期特別展

「屋根を彩る草花―飛鳥の軒瓦とその文様」

2021年10月15日～12月19日

飛鳥地域で使われた古代の軒瓦文様に焦点をあて、モチーフのルーツや文様の変化、飛鳥を中心とした展開等を紹介した。軒瓦ぬりえを作成配布した。会期中の入館者数7,353人。図録『屋根を彩る草花―飛鳥の軒瓦とその文様』刊行。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2021」

2022年1月21日～3月13日

奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会との共催。飛鳥藤原地域の2020年度の発掘調査成果と、牽牛子塚古墳の出土品等を展示した。牽牛子塚古墳パーパークラフトを作成配布した。会期中の入館者数2,588人。カタログ『飛鳥の考古学2021』刊行。



平城宮跡資料館の展示

◆春期特別企画展

第1部「平城宮跡保存運動のさきがけ―大極殿標木建設式120周年―」

第2部「大地鳴動―大地の知らせる危機と私たちの生活―」

2021年4月29日～6月27日

第1部では、120年周年を記念して1901年に地元“都跡村”の人々が開催した大極殿標木建設式を取り上げ、特別史跡平城宮跡における最初期の保護顕彰活動について紹介。地元の旧家で保管されていた標木や関係史料等を展示。第2部は、奈文研内に本部が設置された文化財防災センター等との共催で、木津川河床遺跡等から切り取り保存した地震痕跡資料を中心に文化財防災・減災の取り組みを紹介。会期中の入館者数1,351人。

◆夏期企画展「奈良を測る―森蘊の庭園研究と作庭―」

2021年8月7日～9月12日

奈良の寺社境内や全国各地の庭園の地形を測量し、地形から過去の姿を復元的に考察する手法を確立した奈文研の初代建造物研究室長 森蘊の庭園史研究、作庭家としての業績を紹介。会期中の入館者数2,424人。京都産業大学ギャラリーとの相互共催、合冊で図録刊行。

◆秋期企画展「地下の正倉院展―木簡を科学するⅡ―」

2021年10月9日～11月7日

木簡の木製遺物としての性質に着目した分析・調査や、自然科学分野の手法を応用した木簡研究の成果を展示。会期中の入館者数6,606人。図録刊行。

◆冬期企画展「発掘された平城 2020-2021」

2022年2月11日～3月27日

紀要2020と同2021に掲載された調査研究の成果を紹介した。平城宮東方官衙地区や興福寺境内、平城京左京二条二坊十一坪等の発掘調査成果と出土資料を展示。奈良時代の台所用品や遊戯具、文房具、鬼瓦等研究員による新しい研究成果もトピック展示として紹介した。会期中の入館者数 6,436人。

解説ボランティア事業

平城宮跡解説ボランティア事業は、平城宮跡に来訪される方へ、平城宮跡の理解を深めていただけるよう平城宮跡資料館を中心に第一次大極殿、朱雀門、遺構展示館、東院庭園、平城宮いざない館の定点で案内解説をおこなっている。1999年10月から実施しているが、2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため平城宮跡解説ボランティアによる解説を全て中止した。2022年3月31日現在、解説ボランティアの登録数は127名である。

図書資料・データベースの公開

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の資料を収集している。また、新庁舎図書資料室においても一般公開施設として公開し、より快適な環境下で所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌および展覧会カタログ等の閲覧・複写サービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスをおこなっている。

また、奈文研の刊行物についても、主要なものについてはPDF化をおこない、学術情報リポジトリからインターネットを通じて公開している。



学術情報リポジトリの画面

公開データベース一覧		2021年度 件数
1	史的文学DB	99,996
2	木簡庫（各国語含む）	61,740
3	木簡字典・電子くずし字字典連携検索	26,067
4	木簡・くずし字解読システム-MOJIZO-	264,706
5	木簡人名データベース	1,674
6	全国木簡出土遺跡・報告書DB	1,226
7	和同開珎出土遺跡DB	1,517
8	平城京出土陶硯DB	674
9	3D Bone Atlas Database	※1
10	遺跡DB	8,594
11	古代地方官衙関係遺跡DB	※1
12	古代寺院遺跡DB	※1
13	官衙関係遺跡整備DB	※1
14	古代地名検索システム	9,302
15	Japanese Garden Dictionary	※1
16	薬師寺典籍文書DB	889
17	大宮家文書DB	559
18	所蔵図書DB	99,355
19	全国遺跡報告総覧	8,713,313
20	考古関連雑誌論文情報補完DB	1,490
21	遺跡報告内論考データベース	※1
22	学術情報リポジトリ	21,860
23	文化財総覧 WebGIS	100,235
24	奈良文化財研究所収蔵品データベース （日・多言語合算）	6,367
25	軒瓦三次元計測データベース	

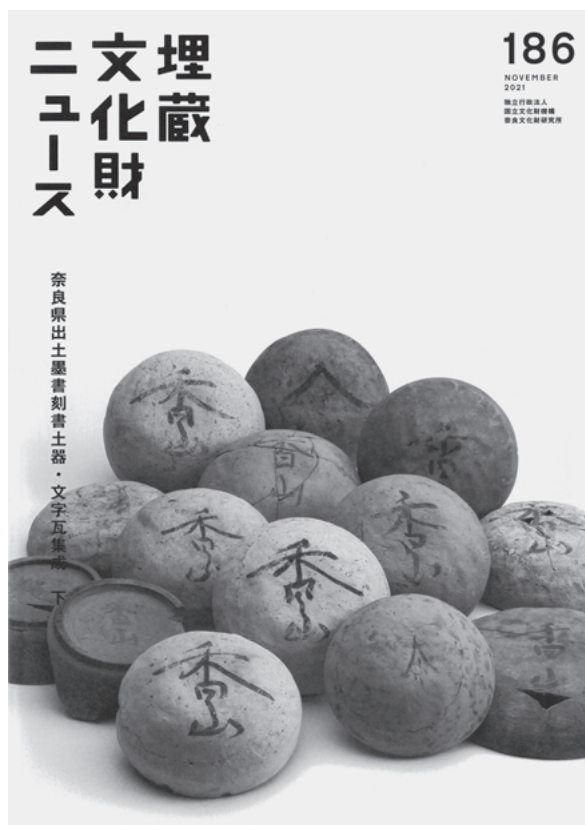
※1 アクセス数のカウントをしていない

3 その他

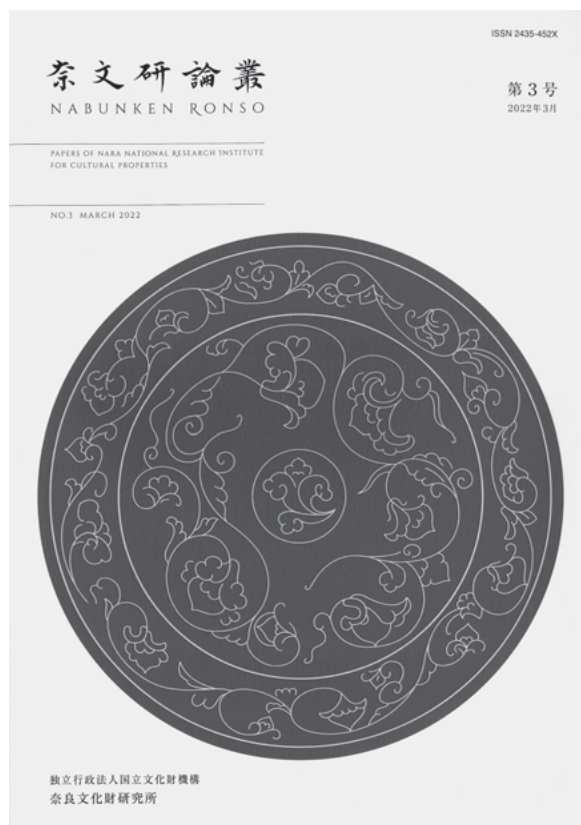
刊行物

刊行物（2021年度）

- ・学報第71冊
『飛鳥池遺跡発掘調査報告』本文編〔Ⅰ〕、同〔Ⅱ〕
- ・学報第99冊
『鞆義黄冶窯発掘調査報告』付論・付表編
- ・学報第101冊
『近世庭園の研究—安土桃山・江戸時代—』
- ・研究報告第30冊『第24回古代官衙・集落研究会報告書「古代集落の構造と変遷1」』
- ・研究報告第31冊『考古学・文化財デジタルデータの Guides to Good Practice』
- ・研究報告第32冊『文化財多言語化研究報告2』
- ・研究報告第33冊『デジタル技術による文化財情報の記録と活用4—オープンサイエンス・Wikipedia・GIGAスクール・三次元データ・GIS—』
- ・研究報告第34冊『文化財と著作権』
- ・飛鳥資料館図録第74冊『屋根を彩る草花—飛鳥の軒瓦とその文様』
- ・飛鳥資料館カタログ第38冊『飛鳥の考古学2021』
- ・『奈良文化財研究所紀要2021』
- ・『奈文研ニュース』No.81～No.84
- ・『埋蔵文化財ニュース』No.186
- ・『奈文研論叢』第3号
- ・『仁和寺史料 目録編〔稿〕五』
- ・『綿業会館家具調度品調査報告書』
- ・『奈良市の庭園総合調査報告書』
- ・『薬師寺東塔発掘調査報告』
- ・『第25回古代官衙・集落研究集会研究報告資料「古代集落の構造と変遷2（古代集落を考える2）」』
- ・『第21回古代瓦研究会シンポジウム発表要旨集「鴟尾・鬼瓦の展開Ⅱ—鬼瓦—」』
- ・『古代瓦研究Ⅺ 鴟尾の展開』
- ・『西トップ遺跡調査修復中間報告11』
- ・『Survey and Restoration of Western Prasat Top Interim Report 11』
- ・『英文スタイル・マニュアル：基礎編 Style Manual for English Texts: General Conventions』
- ・『森蘊の世界—奈良・平安の庭を求めて—』（『奈良を測る—森蘊の庭園研究と作庭—』）
- ・『地下の正倉院展—木簡を科学するⅡ—』
- ・『発掘された平城—2020・2021—』



埋蔵文化財ニュース



奈文研論叢